『合格点』
realclover

1　暗証番号と誤解

　建設中のマンションに、進行方向の左側から暮れかけていく太陽の陽射しがあたる。屈折した光線が国道を走る車のフロントガラスに反射してくる。時折り、対向車から直線的にとどく眩しい光にたじろぎ目を細めながら、慎重にハンドルを操作する。
　仕事帰りの車の中で、FMラジオを聞きながら、最近彼女とうまくいっていないことについて考えていた。建築現場の使い込まれた、ところどころが錆びて赤茶けているクレーンが首の長い大型草食恐竜の化石のようにひっそりどっしりと、そんなことにはまるで興味がないかのように国道を無言で見下ろし佇んでいる。
　言い訳をするわけではないけど、携帯電話のロック機能は彼女と付き合う前からかけている。30分放っておいたら、勝手にセキュリティがかかるように設定している。付き合ってから後に、そんなことをしたらやましいと思われても仕方がないけど、付き合う前からそうしている。なぜなら、もし、落としてしまったり、無くしてしまった時に、心配じゃないか、というのがその理由だ。彼女も最初は理解を示してくれていたのに、どうも最近、視線の厳しさを感じる。頭のかたそうなオンナ友だちに変なことを吹き込まれたのか、ファッション雑誌の真ん中あたりに掲載されている特集記事に書いてあったのか、不信感を抱かれているようでならない。暗証番号を教えようか、と一度問いかけてみたことがある。

「別に知りたくないわ」

　ラジオは天気予報のコーナーにうつり、やけにアニメ声が気になる女性アナウンサーが喋っている。明日の土曜日は夕方から雨が降り出すらしい。空をチラッと見上げてみたが、雨の気配は感じられなかった。別に何か予定があるわけではないから、明日の天気など気にする必要はない。「太平洋の南に大型台風の発生が見られます、今後の雲の動きには十分に注意しましょう」と、何となくからかわれているような声色が耳に残った。
　彼女は百貨店に勤めているので、土日祝が仕事になることの方が多い。まだ付き合って半年、休日が合わないことはお互い承知の上で付き合いはじめた。けれども、同じ地下鉄沿線に住み、駅で数えると5つ離れているだけだ。しかし、実家暮らしなので、なかなか彼女を家に呼ぶことが出来ず、また、彼女は一人暮らしをしているけど、なかなか招待してくれない。こういうのは焦っても仕方ないだろうから、気長に待つしかない。
　歩行者が前を横切るのを待って、交差点を左折する。彼女のなげやりな様子、その理由が携帯電話のほかに思い当たるかどうか、考えてみる。あるいは思い過ごしの原因は、彼女の側にあるのかもしれない。急に担当する部署が変わったとか、新しい上司がきたとか、転勤の内示がでたとか。でも、仕事の話は、特に上司の文句とかは、聞いてもいないのによく話してくるから、そんな大きな変化があれば黙っていることはないと思う。仕事面ではないとすると、家族の問題はどうだろう。ちょっと困ったお兄さんがいるということは聞いているけど、詳しい話を教えてくれない。いずれにしても、まだ6ヶ月しか経っていないのだから、お互いそんなに取り巻かれてい

る生活に変化なんて起きることはないだろうと思う。
　と、自分に言い聞かせてみたものの、もうふり返りたくない頭の片隅に積まれた日記帳を開いてみると、半年もたずに別れてしまった苦い前例もある。どうしようもないときは、どうしようもないのだ。
　きっと、何かの誤解が生じているにちがいない。今のところは、彼女に対して悪いと感じることは何もない。多少の秘密や隠し事はお互い様だ。携帯電話を無くさない最良の方法は、携帯電話を持たないことしかないだろう、とそんな何の解決策にもならないことしか思いつかないので、窓を全開にした。湿った空気が車内に入り、雨の予感が当たりそうな気がした。

２　クロスワードパズルと新しいメガネ

　車窓からの風景に住宅街が入り込んでくる。立ち並ぶ市営団地のベランダには衛星放送を受信するためのアンテナがいくつも設置されていて、目には見えない電波の線が縦横無尽に空を駆け巡っている。テレビの電波、ラジオの電波、携帯電話の電波、パソコンの電波。もしかすると、街で生きる鳥たちはその線を見ることができ、急降下や急上昇をしている時は、有害なそれを上手に避けているのかもしれない。
　日の入りがずいぶんと長くなってきた。暦の上ではまだ6月だけど、日中の気温は既に30℃を超える日もあり、夏がフライング気味に迫っている。最後のひと踏ん張りを西陽に託し、もうすぐ本日の太陽のお勤めも終わる。太陽にサービス残業はない。
　まだ、布団を干したままの家もある。これでもかというくらいにベランダの柵に色とりどりの花を飾っている家もある。そして、カーテンも掛けられていないひっそりとした空き部屋もいくつかある。そんな団地の外観は、クロスワードパズルを連想させた。そして、男女の関係もクロスワードパズルみたいだと思う。男のクロスワードパズルを女が埋めて、女のクロスワードパズルを男が埋める。もう答えが顔に書いてあるよと言わんばかりに簡単な問題もあれば、ヒントの意味すら全く分からない難解な問題もある。これまで彼女のマス目に埋めた答えを、頭に浮かべてみる。

《ピーマンがきらい》
《字がきれい》
《クラリネットが吹ける》
《はやとちり》
《ヨガにはまっている》
《行動力がある》
《行動力はあるのに、歩くのはあまり好きではない》
《寝起きが悪い》
《寝起きが悪いのに、時間通りに起こさないと起こる》
《スペイン語を勉強している》

　信号が赤に変わり、ゆっくりとスピードを緩めていく。サイドミラーにすごい勢いで突っ込んでくる宅配ピザ屋のバイクが映る。横断歩道を猫背のおばあさんが歩いていく。あの疲れたら椅子がわりにもなる、ショッピングカートのような買い物車はいったい何ていう名前なのだろうか。
　とにかく騒がしいヘビメタの歌が終わり、ＤＪがスピーカーに戻ってくる。
「いやぁ、テンションあがる！俺だけか？そうそう、話が急に変わるんだけど、昨日、新しいメガネを買ったんだよ。どんなメガネかって？ブログにアップしておくから見といてくれよ。でも、不思議なもんで、掛けてしまったら自分では見えないのに、なんか新しいメガネって新鮮な気

持ちになるね。メガネ負けしないように、髪型もいつも以上にキメたりしてね。まぁ、初めだけかもしれないけど。みんなも最近買ったもので、気持ちが前向きになってます、みたいなものがあったら教えてくれよ。それじゃ、次の曲いこうか。さっきも明日の天気予報で雨かもしれないとあったけど、これからの季節は夕立に気をつけないとな。折りたたみ傘を忘れずに！と、言うわけで、スガシカオで『夕立ち』」。

～　～　～　～　～　～　～　～　～　～

　ふいに　君がくちずさむ　ぼくはきいてる
　ききおぼえのないメロディー
　もう　消えてしまうくらい　ちいさな声で
　やがて途切れてしまう
　～　～　～　～　～　～　～　～　～　～

３　鼻歌とてんとう虫

　彼女は鼻歌を口ずさんでいる。鼻歌だから口ずさむ、という表現はおかしいのだろうか。公園のベンチに座りながらクレープを食べている時に、お気に入りの雑貨屋で買い物をしている時に。楽しいから鼻歌を唄っているのか、退屈だから鼻歌でも唄ってごまかしているのか、それは未だに判断がつかない。自分としては都合よく前者だと解釈をしているけど、本当はあまり話しかけてこない彼氏に飽き飽きして、鼻歌でデート中の冷戦状態に抵抗しているのかもしれない。米ソ冷戦は武器を積み上げる睨めっこだったけど、彼女の鼻歌の壁を崩壊させるにはどうすればいいのだろうか。

　スガシカオさんの『夕立ち』の歌詞をよく読むと、ここに登場しているカップルはうまくいっているのか、いないのか、どちらにも取れてしまう。もう話すことも尽きてしまった倦怠期にどっぷり浸かっている男と女にも思える。そうかと思うと、言葉のやり取りはなくてもお互いの存在自体を拠りどころに支えあっている理想のカップルにも思えてくる。付き合ってどれくらいのカップなんだろうか、もう何度二人でドライブをしているのだろうか、お互いのことをどのくらい知っているのだろうか、つい想像させられてしまう。

　ゴルフの打ちっぱなし練習場の横を通り過ぎる。上司からはゴルフができると出世が早くなるぞ、とよく言われる。冗談なのか本気なのか、ただ一緒にホールをまわる相手が欲しいだけなのか、苦笑いでやり過ごしている。ダッシュボードの上に小さな物体が動くのを感じた。小さくて赤くて丸っこい、それはてんとう虫だった。いつから、いつの間に車内に入りこんだのだろうか。さっき、窓を全開にしたときにふらっと来たのかもしれない。車外に出そうと試みるも、ちょっと、運転しながらではてんとう虫まで左手が届きそうにない。無理して腕を伸ばしたら、勢い余って危うくつぶしてしまいそうになる。空気の力で飛び立たせようと、思いきり息を吸い込んで、今だ、と吹きかける。けれども、てんとう虫はおかまいなしにダッシュボードの上をチョコチョコと歩いている。もう一度、チャレンジ。今度は微動だにしない。息が切れる。もう、はやく飛んでいけよ、と念じた矢先に羽を広げ、ハンドルに向かってきた。そして、円形のハンドルの上部にポタッと止まった。なんて挑戦的なてんとう虫だと感心しながら、しばらく直線が続くから次の赤信号で停車したときに、外の世界へ帰してやろう。しかし、なかなか赤信号に捕まらない。珍しいこともあるものだと、ぺしゃんこにしてしまわないように慎重にハンドルに置く手の位置を調整する。

　助手席の上に放り投げていた携帯電話が鳴る。彼女からメールが届いた。赤信号で止まると同時に携帯を素早く手に取り、内容を確認する。その一瞬の動作に驚いたのか、てんとう虫が見事な離陸で窓外に羽ばたいていった。

「あしたのこと覚えてる？」

　たった、それだけのことが書かれてあった。何か約束をしていただろうか。思わず、鞄の中から手帳を取り出そうとする。気が付くと青信号に変わっていて、後続車のトラックから大きく3回

もクラクションを鳴らされた。

４　完璧な手帳と正攻法

だいたいにおいて、記憶力が良い方ではない。間近なことはもちろん覚えているけど、例えば、高校２年生で同じクラスだった人の名前は7割覚えていない。幼稚園の時に家族旅行をした時の写真を見ても、まるでその情景を思い出せない。どっかを突っつけば出てくるだろうけど、自力での回復はもう見込めない。「過去は振り返らない。ただ、前のみを見て生きていく」なんて勇ましい台詞はとても似合わない自分だ。だから、後々になって困らないように、予定や大切な事柄はすぐに手帳に書き記すようにしている。大学生の頃は手帳の使い方がまだ下手くそだったけど、社会人になってからは忘れてしまったでは済まされないことばかりなので、休日に出かけるときでも手帳を持ち歩くようになった。

明日の予定は、頭の中に手帳のページを映像で思い浮かべればいい。明日は午後1時から2時までは取引先のA商事と打ち合わせで外出し、3時から5時までは課内での定例会議。彼女も仕事のはずだから、夕方以降に会う約束もしていない。

わざわざ確かめるまでもないと、自信満々に言い切りたいところだけど、あんなメールが彼女から届くと、何か忘れてしまっているのかもしれないと不安になってしまう。完璧な手帳など、この世にはない。少し落ち着いて考えた方がいい。ウィンカーを左に出し、鋭く隣の車線に入る。200メートル程先にコンビニがあるので、いったんそこに停車して対策会議を始めよう。

１、実はデートの約束をしていた。
２、何かの記念日。
３、実際に会う約束ではなく、何かを買うとか頼まれていた。
４、彼女の代わりにどこかに行く、誰かに会う。

いよいよ鞄の中から手帳を取り出して、赤ペンで思いつく可能性を書き出してみた。こういう場合は赤ペンに限る。ひとつ目の可能性は限りなく低い。デートの約束を忘れてしまっていたら、これはもう謝り倒すしかない。ふたつ目、まず誕生日ではない。付き合い始めた日にちでも、告白した日にちでもない。給料日でもないし、公共料金の引き落とし日でもない。レンタルDVDを返却する日でもないし、歯医者の予約も入れていない。みっつ目は少し怪しい。土曜日ってことを考えると、コンサートか舞台かのチケットの発売日だろうか。よっつ目、彼女の代わりに誰かに会う、となると相手のいることだから、そんなことを忘れるなんて考えにくい。

もう、正直に覚えていないことを告白し、彼女に聞いた方が正攻法だとは思う。しかし、そもそも彼女の頼み方に問題があったのではないかと勘ぐってしまう。別に逆ギレしているわけではない。が、たまに10の内容のうち、6を話して相手に10が伝わっていると思い込む節が彼女にはある。言い間違いではなく、少しどこかが欠けてしまっているのだ。それに、こっちの状況や状態をお構いなしに話し始めることも珍しくない。仕事でものすごく疲れているときや、酔っ払っているときなど、電話で一方的に話しが続き、「ねぇ、ちゃんと聞いてる？」とよく言われる。聞いてない、と答えれば、もう一度ふりだしに戻る。誰だって大切な人からの電話であっても、

はやく切りたいときもある。そして、話半分でも、「聞いているよ」といつも答えてしまっている。

昔のメールに何か残っているかもしれないと思い、約150件くらいたまっていた彼女名のメールフォルダ内の履歴を見直してみる。最も古く残っていたのは3カ月前のメールで、「少し遅れそう。電車に乗ったらまた連絡する」だ。横浜アリーナにライブを見に行ったときのだ。あのときは、楽しかった。

たった3ヶ月前のことなのに、既に懐かしんでいる自分がいて、危うく失恋後遺症に悩む失意の男になりかけていた。部屋の模様替えをしていて、昔のアルバムが出てきて、ついつい眺め耽ってしまう例の状態だ。気持ちを切り替えるために、車から降りコンビニの店内に入る。ひんやりとした空気が身体の熱を機械的に取り除いてくれる。ドリンクのコーナーに行き、500mlの紙パックのいちごオレを手の取ってレジに向かった。脳が糖分を欲しがっていた。

　5月27日（金）付けで、気になるメールを見つけた。
〔6月のシフトが出来たよ。明日、会ったときに教えるね。地元の神社のお祭りが最後の土曜日と重なっちゃった。今年も行けそうにないなぁ。残念。〕
　6月の最後の土曜日、まさに明日のことだ。気になって、送信メールボックスから彼女のこのメールに返信した、自分の送信メールを探す。
〔了解。残念だね。明日は10時頃に迎えに行くよ。〕
　次に手帳を再び取り出し、5月27日と28日のページを開いてみる。特にこの神社のお祭りの関しての書き込みは見当たらなかった。28日は隣の県に新しくオープンしたショッピングモールに遊びに行った日だ。映画を観て、買い物をして、ご飯を食べて、そのときにお祭りの話題が出たのだろうか。神社の名前すら覚えていない。これは、もう直接探しにいくしかないと思い至り、残っているいちごオレを一気に飲み干し、彼女の住む町に向かった。
　交番に行くのは気が引けたが、緊急事態、別にやましいことがあるわけでもない、駅前から信号2つ離れたドラッグストアの駐車場に少し車を置かせてもらい、心なしか重く感じる交番の戸に手を掛けた。中には自分と年齢があまり変わらないと思われる若い警察官が、何かの資料に目を通しているところだった。交番、イコール、おじさんの警察官と勝手に想像していたので一瞬とまどってしまった。
「どうされました？」
　顔に似合って、優しく爽やかに問いかけられた。読者モデルで雑誌に登場していても不思議じゃない雰囲気だ。いきなり恥ずかしさがこみ上げてきた。彼の容姿が整っているからか、質問することがくだらないことだからか、交番ではなく駅員さんに聞きに行けばよかったとふと思った。が、無言で立ち去ると余計に怪しまれるだろうから、心を決めて尋ねてみた。
「それは、●●神社のことですね。確か江戸時代の頃から続く、由緒あるお祭りですよ。特別なことと言えば、このお祭り限定のお札が販売されることじゃないかと思います。縁結びのご利益があるみたいです」
　思わず彼にハグしそうになる気持ちを抑えて、丁重にお礼をして交番を出た。若いのに、よく町のことを知っていて、なんて素晴らしい警察官だろう。新聞に投書でもしようかと思ってしまう。さて、肝心の神社はここから歩いて15分くらいの距離らしい。車はドラッグストアにそのまま置かせてもらい、探しに行くことにする。そして、まだ彼女にメールを返信していないことに気付き、意気揚々に打ち込んだ。

「覚えているさ、まかせといて！」

　もう他の選択肢が頭に浮かばなくなってしまった。

6　入り口と自然な動き

　6月26日、日曜日、得意満面のニヤ顔と縁結びの御札を携えて、彼女が仕事を終えるのを百貨店の近くのいつものコーヒー店で待っている。早く彼女に会いたくて、時計を何度も見てしまう。まだ5分と経過していない。こんなに会いたい気持ちが高ぶるなんて、付き合いはじめの頃を思い出す。少し、その感じは違うけど。
　形容しがたい緊張感で、あっという間にコーヒー・モカブレンドを飲み干してしまった。そんな挙動不審な青年に対しても、店員さんは優しく水のおかわりをコップに注いでくれる。軽く会釈をして、どうも、なんて答えながらも、視線は入り口のガラス扉のその先に向けられている。どうせ、しばらく待たされるだろうと思って、持ってきた読みかけの文庫本も全く読む気になれなかった。日曜日の百貨店の回転式扉の入り口は、まるで工場の機械の一部のように、様々なブランド名が表示された大きなバッグを抱えた人々が、規則的なリズムで吐き出されるように見えてしまう。

「お待たせ。ごめんね、遅れちゃって」
「いや、大丈夫だよ。何か、注文したら？」
「でも、夕ご飯食べに行くでしょ？お腹空いちゃったよ」
「そうだね。じゃ、出るか」
「なんか、そわそわしてるけど、どうかした？」

　こういうことは早めに終わらせた方がいい。たかだか神社の御札を渡すことくらいでドキドキしていたら、プロポーズのときには高熱が出て、寝込んでしまうんじゃないだろうかと思う。普段はあまり使わない大き目の鞄から、御札を取り出す。生まれたばかりの子猫をそっと持ち上げるように、静かに、慌てずに。
「いや、コレ、買ってきたよ」
　そう言って、見た目の上では、何気なく、淀みのない自然な動作を装いながら彼女に手渡した。

　彼女が御札を見つめている。表に書かれている文章を読み、裏返し、また表に目を通す。彼女と目を合わすことが恥ずかしく、彼女の手元しか見ないようにした。どうやら何度か、彼女は自分の方を見た気がしたけど、顔を上げなかった。

「あぁ、そういうことか」

　思わず、と言った風に彼女は言葉を発した。やっと、彼女の顔を見ることが許されたような気がした。見上げると、彼女は縁結びの御札を手にとって、楽しげに眺めている。予想していた彼

女の反応と少し異なることに戸惑ってしまい、かける言葉が出てこない。
「うん、合格点はあげようかな」
　彼女はクロスワードパズルの最後の暗号を解いたような満足した表情で、御札をそっとテーブルに置いた。

7　修学旅行と100点満点

　彼女の実家は京都市上京区にある。残念ながら、まだご挨拶にお伺いしたことはない。実を言うと未だに、京都にすら行ったことがない。修学旅行は日光東照宮だった。いろは坂でバス酔いした。京都にはやたらと神社仏閣が多いという印象があるけど、彼女の実家の近くにそびえるのは北野天満宮だ。
「地元って言ったらさ、普通は実家のことでしょ」
と、まるで「枝豆って大豆のことだって知らなかったの？」とか、「ＰＤＣＡサイクルのＡって、何の頭文字か知らないの？」とか、「島根県の県庁所在地も知らないの？」と上から目線で言われている気分になる。頭の中に見たこともない不思議な光景が浮かんでくる。北野天満宮の本殿には枝豆が祀られ、人々は『A』と書かれた小さな木札を賽銭箱に放り投げては、呪文のように島根県の県庁所在地を言い続けている。そういえば、昨日は夕方から雨の予報だったのに、降らなかった。天気予報が外れたときの気象予報士の気分でどんな感じなのだろう。そんなこと、いちいち気にしていたら務まらないか。太陽は定時を守って働いてくれるのに、雨ときたら本当に気まぐれだ。

　彼女が北野天満宮の説明をはじめている。さすがに名前は知っている。菅原道真を祀っていることだって知っている。学問の神様と崇められていることだって知っている。これでも日本史専攻だ。彼がどうして神様として祀られるようになったのかもだいたい知っている。だからと言って、菅原道真の誕生日が6月25日で、毎年、北野天満宮で御誕辰祭というお祭りが催されていることなんて知らない。
「お母さんにメールを送ろうとしたら間違えちゃって。今の違うよ、って送り直そうとしたら、現場からヘルプの呼び出しがあったの。しばらくして、戻って携帯見たら、まかせてくれ、なんてメールが入ってた。えぇ〜、さっきのは違うよ、と思ったけど、何を勝手に任されたのか面白くなって、そのままにしてみたの」

彼女が喜んでくれるなら、どんなことでも致します。
その前に、もう一杯コーヒーが飲みたい。とびきり苦い、ブラックなコーヒーを頂けますか？

「この縁結びの御札、大学生の時に買いに行ったよ。確かに効き目があった。でも、ジンクスがあって、付き合っているカップルが買うと、年内に別れてしまうんだって。一緒に買った友だちは彼氏がいたんだけど、本当に夏が終わると別れちゃったからね。でも、クリスマスには新しい彼氏が出来てたから、それも御札のおかげだったのかな」

「だいたい、どうして縁結びなのさ。わたしたち、もう付き合っているのに。もうすぐ、スペイン語検定の2次試験があって、毎日勉強してるの知ってるんだから、ついでの学業成就のお守りも買ってきてくれたら、100点満点をあげたのになあ」

彼女のクロスワードパズルは、まだまだ答えを埋められそうにない。

（おわり）

合格点

http://p.booklog.jp/book/29717

著者 : realclover
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/realclover/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/29717

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/29717

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.